

# ある翻訳者が自立に至る径路

## ——移動して学ぶ時代の日本語教育への示唆——

### The Trajectory of a Translator to His Independence: Suggestions to Japanese Language Education in the Era of “Learning While Moving”

丸山千歌・小澤伊久美  
MARUYAMA Chika, OZAWA Ikumi

#### 〔要旨〕

本研究は、日本での1年の留学を経て大学を卒業し、フルタイムの翻訳者として日本で働くことを選択して数年以上経過している元日本語学習者が、日本での日本語学習や経験をどのように意味づけているかを考察した事例研究である。具体的には、調査協力者に、まず、個人別態度構造分析（PAC分析法）を実施し、さらに複線径路・等至性アプローチ（TEA）によって分析を重ねた。その結果、調査協力者が現在に至るには日本語学習が欠かせない要因となっていること、母国や現地の友人とのつながりや、留学先の大学職員からの仕事の依頼など、調査協力者の人生の様々な時点での出来事が、日本語学習の動機を高め、調査協力者が自身の将来を考えるきっかけになっていることが明らかになった。本稿では、それを踏まえて、より広い視座から日本語教育・日本語学習をとらえる重要性を提案する。

#### 〔Abstract〕

This paper is a case study of an ex-learner of Japanese, who spent a year of study abroad in Japan a few years ago and chose to live in Japan as a full-time translator after the graduation from university. It aims to analyze how this person considers the meaning of Japanese language learning in Japan and study abroad experience in Japan. The case is investigated using Personal Attitude Construct (PAC) analysis first, and then Trajectory Equifinality Approach is applied for analyzing details. This study points out the following two:

- 1) Japanese language education is inevitable factor for constructing the person's present life,
- 2) various experiences while living such as the relationship with the one's own country or friends there, work request from the university the one stays in Japan motivated Japanese language learning more, and it becomes an opportunity to consider the one's future.

Upon the findings above, this paper suggests the significance of comprehending the Japanese language education and Japanese language learning from the broader perspective.

**Key word:** 日本留学、日本語学習、卒業後の進路、日本社会との関係を維持、きっかけ  
Study abroad in Japan, Japanese language learning, Course after graduation,  
Maintenance of relationship with Japanese society, Trigger



## 1. はじめに

ヨーロッパでは1985年のエラスムス計画を発端に、日本では留学生10万人計画そして30万人計画を受け、若者が世界中を移動しながら学び成長する姿が自然な形として受け入れられるようになってきている。こうした移動しながらの学びに期待されるのは、グローバルな観点から、「21世紀型スキル」(三宅他、2014)を持った人間を育てることであるが、もう一方には、ローカルな観点から、「現地を知っている」「現地に通じる」人間を増やすこと、日本で言えば「知日派」の育成がある。日本留学を経て母国の大学を卒業し数年以上経過している日本留学経験者自身が、日本留学体験・日本語学習体験をその人生の中でいかに位置付けているか、その位置付けの変容を通時的な視点で捉えることは、上述のグローバルな観点とローカルな観定の両方を持ち合わせた日本語教育の可能性を示すことにつながる。

そこで、本研究は個人別態度構造分析(PAC分析法)と、人間の成長を時間的変化と文化社会的文脈との関係の中で捉え、記述するための方法論的枠組み複線径路・等至性アプローチ(TEA)を採用した事例研究として、日本での1年の留学を経て大学を卒業し、フルタイムの翻訳者として日本で働くことを選択して数年以上経過している元日本語学習者が、日本での日本語学習や経験をどのように意味づけているかを考察する。

具体的には、調査協力者に、まず、個人別態度構造分析(PAC分析法)を実施し、それを踏まえてさらに調査協力者にインタビューを重ね、複線径路・等至性アプローチ(TEA)によって分析した。その結果、調査協力者が現在に至るには日本語学習が欠かせない要因となっていること、母国や現地の友人とのつながりや、留学先の大学職員からの仕事の依頼など、調査協力者の人生の様々な時点での出来事が、日本語学習の動機を高め、調査協力者が自身の将来を考えるきっかけになっていることが明らかになった。本稿では、それを踏まえて、より広い視座から日本語教育・日本語学習を捉える重要性を提案する。

## 2. 先行研究

本研究の発端には、日本語教育では、書下ろし教材でも生教材でも日本社会や文化をトピックとして扱う教科書が多いが、他分野から、例えば社会学の研究者からは、外国語教師である日本教師が日本人論の伝播の過程において、文化的差異をめぐるステレオタイプの言説の再生産や伝播の一翼を担っているという批判(吉野、1997)や、1990年代後半であっても1970年代に流行した日本人論の代表作が語学教材として積極的に消費され続けているという指摘(吉野、1997)、そして異文化間教育の研究者からは日本語教育にステレオタイプを温存する教師文化が存在するという指摘(倉地、2007)を受けてきたことにある。

このような課題に対し、日本語教育では佐藤他(2008)などが教材分析と授業観察、それに基づいた授業改善に重点を置いた取り組みを行っているが、筆者らは学習者の視点から、教材作

成や教材選定、授業運営への提言につなげる取り組みをしてきた。具体的には、内藤（2002）の PAC 分析法を研究手法として、主に次の4つの知見を得てきた。①オセアニアの日本語学習者を対象とした縦断的研究で、ステレオタイプのな読解教材の記述が調査協力者の日本・日本社会のステレオタイプを強化していることを示し、予想以上にステレオタイプの教材の与える影響は大きい（丸山、2007）、②ステレオタイプのな教材の読み取りは留学をすることだけでは変わらず、むしろ留学中の接触体験の深さと新味が、日本語学習者の批判的な視点を持った、主体的な読みを促す鍵になるというもの（丸山・小澤、2011a）と、③英国の日本語学習者を対象とした縦断研究により、日本への留学前の留学経験の有無が、日本語学習者の主体的な読みを促すもう一つの鍵になるということ（丸山・小澤、2011b）、④日本語教材に対し相対的な視点を持つ資質がすでにあつたとしても、日本語学習者の学習スタイルに配慮した日本語授業のデザインがなければ日本語能力の向上を促すのが困難であること（丸山・小澤、2011c）である。③④の知見は、各調査の実施間隔をより長く設定して、学習者自身が留学経験について時間をかけて内省する期間をより確保したことや、執筆者らが留学前後の日本語力の差を見極められたことにより得られたものである。

これらの知見から新たな課題として、日本留学を経て母国の大学を卒業し数年以上経過している日本留学経験者自身が、日本留学体験・日本語学習体験をその人生の中でいかに位置付けているか、その位置付けの変容を通時的な視点で捉えることが生じたが、この課題に応えることが、冒頭で述べたグローバルな観点とローカルな観定の両方を持ち合わせた日本語教育の可能性を示すことにつながると考える。

### 3. 方法

#### 3.1 調査協力者の概要

調査協力者は現在日本の翻訳事務所に翻訳者としてフルタイムで勤務していて、今後も翻訳者として日本・日本語と関わりながら生活を営む予定の日本語非母語話者1名（以下、協力者A）で、概要は表1の通りである。オセアニア地域の大学で Computer Science を専攻して卒業した後、オーストラリア国内で就職、就職後仕事をしながら再び大学に入学する道を選択し、Asian Studies で日本語を専攻した。この間に、交換留学により日本へ留学し、大学卒業後に再び渡日、いくつかの仕事経験を経て、現在に至る。インタビューは対面で3回行った。

表1 協力者Aの概要

出身地	オーストラリア
年齢・性別	30代・男性
勤務地・職業	東京・翻訳者
日本語学習歴	オセアニア地域の大学で Computer Science を専攻していたころに独学で学習を開始、再度大学に入学し Asian Studies で日本語を専攻したときに本格的な日本語学習を開始した。1年の日本への交換留学後、JLPTのN2に合格、その2年後にJLPTのN1に合格した。本格的に日本語学習を開始してからN1に合格するまでの期間は約6年間。非漢字圏。
母語	英語
インタビュー実施時期	1回目：2017年1月14日（約2時間半） 2回目：2017年4月9日（約2時間） 3回目：2017年6月18日（約2時間）

### 3.2 インタビュー方法

本研究は、元日本語学習者の日本留学や日本語学習の経験や日本語学習への意識、日本社会との関わり、仕事に対する意識に関する要因とその変容プロセスを詳細に把握する必要がある。そこで、インタビューの主軸には後述のTEAによる分析を据え、TEM図を用いて調査協力者の生きた時間を描いて分析することを目的にインタビューを行った。具体的には、協力者Aに同意を得た上で筆者らが3回インタビューを行った。まず1回目はPAC分析インタビューの手法で、2回目はTEM図を作成するためのインタビューを、3回目はTEM図を確認するためのインタビューを行った。

TEAは、人間の成長を時間的変化と文化社会的文脈との関係の中で捉え、記述するためのアプローチであるが、その技法の一つに複線径路・等至性モデル（Trajectory Equifinality Model: TEM）がある。これは、個人に経験された時間の流れを大切に、発達の有り様や人生の径路を、非可逆的に進む時間軸の中で変容のプロセスとして描き出す技法で、描かれた図をTEM図と呼ぶ。一般的にTEAによる研究において、インタビューは、安田・サトウ（2012、2017）に見るように、1回目のインタビューで、設定した研究課題に係る半構造化インタビューを行い、その後TEM図の作成・確認のためのインタビューを行う手順をとるものが多く、本研究のように1回目のインタビューにPAC分析インタビューの手法を用いた研究例はまだ少ない。PAC分析インタビューをTEAによる研究に活用する研究例は、坪根・小澤・八田（2015）がある程度にとどまるが、本研究はこの手順をとる。

佐藤（2015）は、自身のインタビューの記録をたどり直す中で、インタビュー実施者と協力者とが、インタビュー実施者の協力者に期待するストーリーを共同で構築していることに気づいたことを報告している。PAC分析法は、自由連想に基づくインタビューで、インタビューの元となる連想語が「調査協力者の自由連想によって出されるため、調査協力者は調査者が想定しなかった項目も提示することが可能」であり、そのため、調査項目の設定の自由度が各段に高い、また調査協力者が中心となるという特徴がある（丸山、2016:364）。本研究は、この特徴を生か

して、佐藤（2015）が指摘するインタビュー上のリスクを低減する手順を踏む。

PAC 分析で使用した刺激文は「わたしと日本・日本語の過去・現在・未来と聞いて思い浮かべるのはどのようなことですか。あなたが思い浮かべたことを言葉やイメージで表してください。書くときには思いついた順に、順位の番号を付けてください。」である。

## 4. 結果

### 4.1 PAC 分析インタビューの結果

PAC 分析インタビューは内藤（2002）の手順で進め、協力者 A は 31 の連想語を挙げた。統計処理は、重要度順に並べた各連想語の非類似度評定を SPSS version20 を用いて階層的 CL 分析にかけるといった手順をとったが、その結果描画されたデンドログラムを図 1 に示す（左の数値は各連想語の重要度順位である）。各連想語と連想順位、重要度順位、印象、4 つの CL の名付け、全体の CL の名付けは表 2 の通りである。

PAC 分析インタビューで、協力者 A はこれを 4 つの CL（以下、CL）に分けることに同意し、各 CL を次のように名付けた。重要度順 6, 18, 19, 7, 9, 13, 31, 11, 26 の 9 項目から成る CL1 は「読む」、同 21, 24, 17, 23, 15, 20, 25 の 7 項目から成る CL2 は「日本だな」、同 27, 28, 22, 3, 5, 2, 1, 29, 30 の 9 項目から成る CL3 は「仕事と家族」、同 14, 16, 4, 10, 12, 8 の 6 項目から成る CL4 は「話すと聞く」、

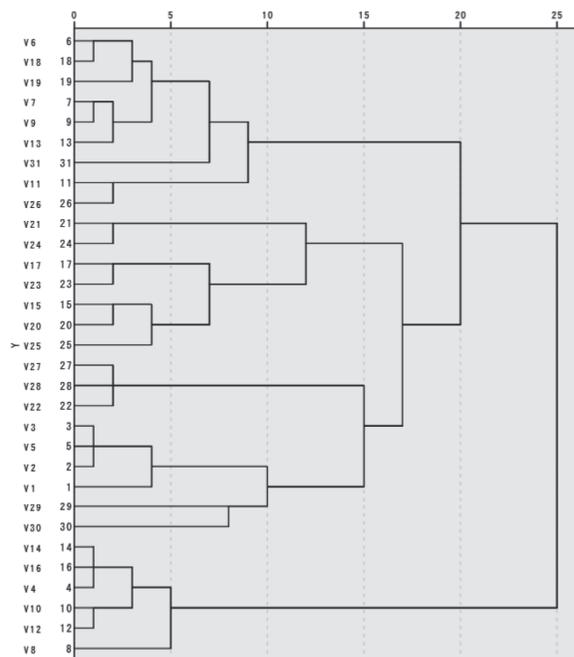


図 1 協力者 A の連想語の非類似度評定を階層的 CL 分析にかけて描かれたデンドログラム  
（表左の数字は、連想語の重要度順の番号）

表2 調査協力者Aの連想語と順位、印象、およびCLの名付けの内訳

4つのClusterの名付け	重要度	連想語	印象	想起順	Dendrogram登場順
① 読む  ② 日本たな  ③ 仕事と家族  ④ 話すと聞く	6	Being able to read Japanese as fun	+	31	1
	18	Reading Out Loud	+	8	2
	19	Great Bookstores	+	30	3
	7	Kanji Cards	+	7	4
	9	Lots of self-study (fun)	+	14	5
	13	Shinjuku street signs- I can read them all	0	20	6
	31	穴うめたんごテスト	+	12	7
	11	Borrowing my sister's books for learning Japanese	+	21	8
	26	Katakana	0	5	9
	21	Anime- lots- seeing Sprited Aways in 2003 (?)	+	22	10
	24	Astro Boy	0	1	11
	17	Samurai / Edo	+	3	12
	23	時代小説は読みたいけど、表現・たんご・かんじはまだかべ (小説家は“むずかしい”かんじが好きらしい)	-	11	13
	15	Beautiful Autumn Foliage	+	27	14
	20	Castles	+	23	15
	25	Cold / Winter	0	4	16
	27	Office work	+	6	17
	28	Squashed on trains	-	25	18
	22	翻訳を一日やったら夜はもう日本語読みたくない	-	6	19
	3	Introducing my family to wife's family	+	16	20
	5	Communication	+	9	21
	2	Getting married	+	15	22
	1	Daughter / Family	+	2	23
	29	Smoking (sucks)	-	26	24
	30	Worry over Japanese Economy	-	17	25
	14	花見	+	28	26
	16	Nomikai (X大学)	+	29	27
	4	Lots of friendly people	+	24	28
	10	X大学の学生と日本語で話す	+	19	29
	12	お酒は日本語学習の役に立つ	+	18	30
	8	オーストラリアで3年間べんきょうしても、話が早先生は聞き取れなかった (X大学で)	0	13	31

\* 連想語で具体的大学名が記されていた部分は大学の特定を避けて「X大学」とした。それ以外は全て協力者Aの記載のまま。

\* 重要度順 29位の項目の印象が「-」となっているが、これは協力者A本人の発言の通りに記載したものである。

そしてCL全体を「日本語の勉強で得た人生」と名付けている。

PAC分析インタビューでは、調査協力者がまず各CLの印象について述べ、次にCL間の共通点や相違点についての印象を自由に話す手順をとるのが基本である。本調査では、まず、各CLの印象について、協力者Aは、CL1「読む」は、文字が全然読めない状態で新宿の街を見ると、蛍光灯でライトアップされているところが多く、SF映画の「ブレードランナー」の1シーンのような大都市の未来感が感じられるが、文字を読む力を得ることによって、各店が単なるレスト

ランだったりカラオケ店だったりと認識をすることができる」と述べた。また、日本語学習の初期に、中学校のときのみ日本語学習経験がある姉の本を借りて、ひらがなを集中的に勉強したということ語った。CL2の「日本だな」は、日本に関する連想語が出てきたと分析し、初めて見た日本のアニメ「Astro Boy (鉄腕アトム)」、幕末を舞台にしたアニメ「るろうに剣心」、宮崎駿のアニメ「千と千尋の神隠し」などの鑑賞経験や、城や紅葉が日本について思い浮かべるものであることを語った。CL3の「仕事と家族」では、日本人の女性との結婚と、もうすぐ生まれてくる子どもとの出会いを楽しみにしていること、結婚を通して日本と協力者Aの家族の国とのコミュニケーションが得られるようにと思い行動したこと、日本の経済状況の自分の仕事への影響、仕事が家族を支えるという関係性について語った。CL4「話すと聞く」では、日本への1年間の交換留学経験が中心に語られ、3年間国で日本語学習をしたにもかかわらず渡日後は先生の話す日本語が聞き取れなかったこと、「飲みニューケ——ション」の中で、自分のストーリーを整理して話すようになったし、自分の日本語の弱点を気にせずに話せるようになる大事な機会だったと語った。このように各CLは、調査協力者の個別具体的な経験に関する連想語で構成され、2つは日本語学習経験について、1つは日本について、1つは家族と仕事についてのまとまりになっている。

次にCL間の関係について、CL1「読む」とCL3「仕事と家族」は1が「勉強と定義するとすると、3が、現在か将来に関係している。」「いろんな、まあ勉強、まあ、その、主に、読む、力を得たおかげで今の仕事もできていますし、ま、仕事を通じて、家族を支えていますけど、それも、日本の生活もやってるんですけど、それは、あんまり、あの一、意識してないというかまあその、単なる、まあ、パッシブな力になってます。」と述べた。またCL1と4の関係では「1はあの、読むは1人で、4はほかの相手がないと、駄目。」「特に日本語は、まあ、自分、と一緒に、あの、と同じような、まあ、日本語を勉強する、学生もいいんですけど、日本人と日本語で話すのは、一番と思います。」の述べ、CL2と4の関係では2が花見や飲み会などの話す場で話のネタになるものという共通項がある一方で、2は自分の好みや趣味、日本でしたいこと外か趣味に関するもので自分が経験するものであり、4は飲み会など「大きな部屋」つまりグループで経験するものであると述べた。そしてCL3と4については「4番は、まあ、あの一、1番と同様に、え一、過去、あまり過去のこと、過去の経験、(うん) まだ、この4番の、あ一、生かしてますけど」、「(3)の仕事と家族についてはまだ続くんですけど、こういう4番の話は、あの一、終わってるか、あの、停止してます」と述べた。

調査協力者はCL全体を「日本語の勉強で得た人生」としているが、CL間の関係についての発話から、日本のアニメ、歴史、小説、観光地を含む日本という場所への様々な関心(CL3)が日本語を通じた他者との交流を含む日本語学習(CL1、4)の継続の要因となっているようだということと、調査協力者が日本語学習によって得た読む力(CL1)と日本語による他者との積極的な交流を通じて得た聞く、話す力(CL4)が、現在の本人の状況、すなわち日本で仕事を心得、仕事を通じて家族を支える生活の力になっていること、そしてその日本語学習経験は、現在はあ

まり意識されないパッシブな力となっている（CL3）ことがわかる。

これらの意識や経験が調査協力者の現在とどのような関係性を持つかを丁寧に見ていくために、TEM 図を描くためのインタビューを2回実施したが、次節ではそのインタビューも踏まえて、TEA に基づいて分析し、記述する。

## 4.2 TEM 図によるインタビュー

### 4.2.1 分析のための枠組み

まず、TEM による分析のために必要な概念は、等至点（Equifinality Point: EFP）、両極化した等至点（Polarized Equifinality Point: P-EFP）、分岐点（Bifurcation Point: BFP）、必須通過点（Obligatory Passage Point: OPP）、社会的方向付け（Social Direction: SD）、社会的助勢（Social Guidance: SG）の5点である。本研究における概念の意味は表3の通りである。

表3 TEM の用語と本研究における具体例

用語	本研究における具体例
等至点（EFP）	日本や日本語と関係を持ち続けて生きる
両極化した等至点（P-EFP）	日本や日本語と関係を持ち続けて生きることを諦める
分岐点（BFP）	① 大学で Asian Studies を専攻し日本語を学習する ② 日本へ留学する ③ 翻訳者になろうと思う、日本語を自分のものになろうと考える ④ よりよい職場へ移りたいと思う ⑤ 専門性を高めたいと思う ⑥ よりよい職場へ移りたいと考える ⑦ 日本での転職を考える ⑧ 療養後に母国で翻訳の仕事を再開する ⑨ 日本に戻って働こうと思う ⑩ よりよい職場へ移りたいと思う
必須通過点（OPP）	① 日本・日本語と関わって生きようとする ② 日本で仕事をして生活するために日本へ戻る
社会的方向付け（SD）	① リーマンショック ② 東日本大震災
社会的助勢（SG）	① 言語教育観 ② 家庭環境 ③ アニメが若者にも愛好される ④ ネットフォーラム活動の活発化 ⑤ 日本語学習のネットフォーラムの存在 ⑥ 就職先にあった、離職せずに進学できる制度 ⑦ 交換留学制度 ⑧ 大学の日本語学習デザイン ⑨ 交換留学先での出来事（翻訳の仕事に任される） ⑩ 職場環境 ⑪ 日英翻訳は英語母語話者の報酬が高い ⑫ 海外居住で契約更新不可 ⑬ 米ドル安 ⑭ 日本にいと心が穏やかになる

#### 4.2.2 日本・日本語と関わって生きることに對する協力者 A の意識の変容

協力者 A が EFP 「日本や日本語と関係を持ち続けて生きる」に至るまでの経験を TEM 図 (図 2) に表し、TEM 図の全体像を下の第 I 期から第 IV 期の 4 つの期間に区分した。

- 第 I 期 オセアニア地域内 — 大学で Asian Studies を専攻し日本語を学習する前まで
- 第 II 期 オセアニア地域内 — 日本語学習を本格的に開始してから、日本に留学するまで
- 第 III 期 日本国内・オセアニア地域内 — 日本留学時から、大学卒業後に日本へ戻るまで
- 第 IV 期 日本国内 — 日本へ戻って日本で仕事をし、生活を始めてから現在まで

各区分ごとに、表 3 で表した BFP ①～⑩の分析結果を中心に、協力者 A の語りを記述する。

##### (1) 第 I 期 大学で Asian Studies を専攻し日本語を学習する前まで：BFP ①以前

もともと勉強することによって、自分の視野や考え方が広がるという考えを持っていた。小学校のときに家庭環境 (ルーツ言語) の影響でドイツ語を学び始め、高校 1 年のときはドイツ語の教師の人柄 (面白い) にひかれて学習が継続したが、高校 2 年のときはドイツ語にそれほど関心が持てなくなり、教師が嫌いで高校 3 年次は成績も最低だった。高校上級課程相当の 2 年間は家

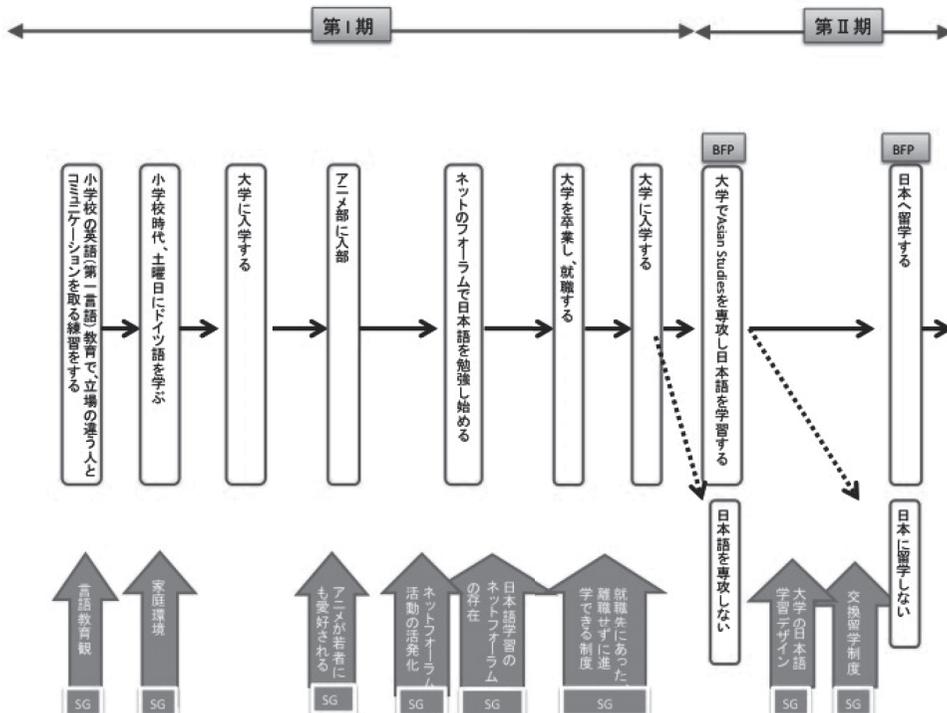


図 2-1 協力者 A の TEM 図 (1/4)

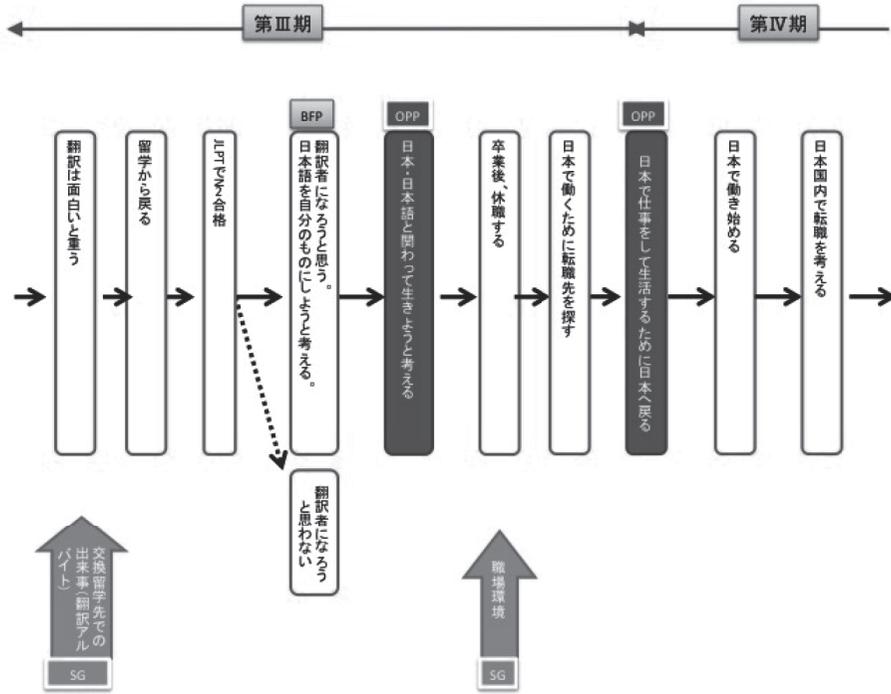


図2-2 協力者 A の TEM 図 (2/4)

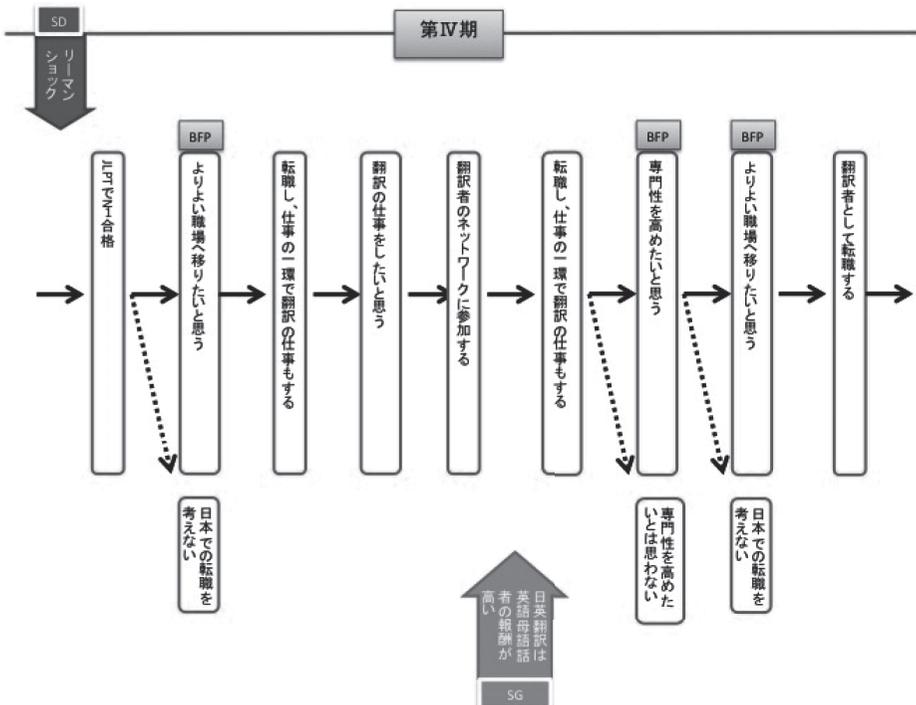


図2-3 協力者 A の TEM 図 (3/4)

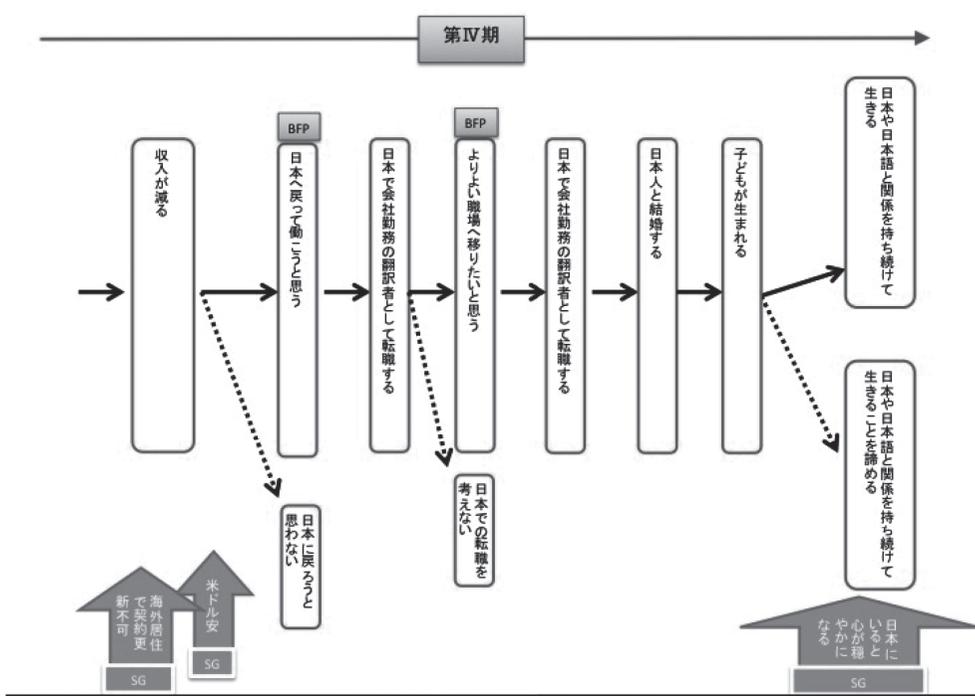


図 2-4 協力者 A の TEM 図 (4/4)

族の影響があってリーガル・スタディを学ぶ。同時にウェブへのあこがれがあり、大学に進学後は Computer Science を専攻した。このころ、大学でアニメ部があり協力者 A も参加した。日本語学習経験がある姉の本を借りるなどして日本語学習を独学で開始し、ネットのフォーラムでも日本語を学び、日本語を学ぶのは面白いと思った。大学卒業後は国の公的機関に入省し、就職後に、就職先に大学に入って勉強できる機会があることを知った。そこで上司に相談をして、再び大学に入学し、離職せずに Asian Studies で日本語を専攻することにした。

(2) 第 II 期 日本語学習を本格的に開始してから日本へ留学するまで：BFP ①～②

日本語学習を本格的に開始し、たくさん勉強し、日本語を読んだが、「読めた」という Zone に入った実感は持てなかった。その中で交換留学生として 1 年間日本へ留学することにした。

(3) 第 III 期 日本留学時から、大学卒業後に日本へ戻るまで（日本・日本語と関わって生きようと考える時期まで）：BFP ②～③

留学先では日本語クラスを履修し、授業で違う文化の人が書いたエッセイを読んで、面白い考えもあるんだと思った。新聞記事は意見がなくてつまらないと思った。留学中は、文化も言語も違う留学生同士の交流や、タクシーに乗ったときに日本語で道を指示するなどの体験をしたし、日本文化・社会は面白いと思った。ふり返ってみて、日本留学は日本語マスターの大きな一歩に

なった。日本に「いる」ことに意味があった。

留学中に、報酬なしだが、大学の事務スタッフに翻訳を頼まれた経験をして、翻訳は日本語を理解し、英語でうまく表現するために頭を使うので面白いと思った。もともと性格的に頭を使うことが楽しいと思えるところがあった。

留学後は、大学の日本語プログラムの必須課題である漢字テストに合格し、また JLPT の N2 にも合格した。大学を卒業したあとに、日本・日本語と関わって生きようと考えた。職場の先輩から、日本を知りたいなら日本へ行ったほうが良いと勧められもした。ただ英語教師として働くのは嫌で、IT の仕事で日本へ行こうと思い、仕事を休職した。このころまでは日本語をいっぱい勉強して、JLPT の N1 にも合格した。N1 の勉強は面白かったけど、役には立たないと思う。転職サイト「だいじょうぶ」を見つけ、面接も協力者 A の国内で受けられ、IT 企業への採用が決まり、渡日する。

#### (4) 第Ⅳ期 日本や日本語と関係を持ち続けて生きるための模索：BFP ③～⑩

しかし業務内容がサーバーのサポートで、「プログラマー」のほうが性格的に向いていると思っている協力者 A は転職を希望する。新しい仕事が決まったときに、リーマンショックが起き、転職ができなくなり、再度就職先探しをすることになる。プログラミングの仕事先が決まったものの、そこで翻訳業務にも携わらせてもらったことから、その半年後には、翻訳の仕事がしたくなり、再び転職活動を行う。翻訳者ネットワークを見つけて参加、翻訳者間でネット交流が発展した。そこで翻訳の仕事を紹介されて転職し、業務の中でよりよい翻訳について教えてもらった気付きを得たりする経験をする。そのような中で、翻訳の仕事が続けるなら自分の分野がないといけなことを翻訳者ネットワークの中で教えてもらう。また、翻訳者として成長していく際、フィードバックが重要だが、雇い主からのフィードバックは得られず、翻訳者ネットワークのフィードバックが役に立った。

英語母語話者が日英翻訳をすると報酬が高いというメリットがあり、派遣で仕事を続けたが、東日本大震災があり仕事が減ってしまう。その後よりよい職場を求めて大学機関に派遣の翻訳者として入る。病気のために手術をしたりしながら仕事を続けるが、震災後の節電の影響で労働環境に快適さを欠いたこと、集中する作業には職場の席の配置が向いていないなどの条件が重なったことから、よりよい仕事を求めて転職し、特許関係の翻訳に携わった。その後、フリーランスの翻訳の仕事も引き受け始め、自信が持てた時にフリーランスの仕事のみに切り替えた。しかし、病気が再発して長期療養が必要になり、生活環境の良さを考え、治療中の一時帰国を決める。回復後は母国で翻訳の仕事を開したが、海外にいて契約更新ができなかったり、米ドル安になったりするなどが原因で収入が減った。もともと日本に戻って翻訳の仕事に就くことも考えていたため、このタイミングで再び渡日し、派遣で翻訳の仕事につく。ここでは分野を広げたいと思い経済に関わる翻訳に携わる。しかし、求められる仕事のスピードが速すぎ、よりよい職場を求めて、再び転職。現在の契約社員としての翻訳の仕事に就く。現在の職場では同僚がフィー

ドバックをしてくれ、翻訳者としても成長している。翻訳の楽しさは、集中してはまる、自分にとって“in the zone”だと思う。数年前から落語をとともに聞きに行くなど友人としてつきあってきた日本人の女性がいたのだがその女性と結婚をして、もうすぐ子どもが生まれる予定である。結婚相手と出会ったから日本で働き生活したいと思ったのではなく、伴侶との出会いは、自分は日本で働き生活するという強い気持ちを持って生活を切り拓いていく中で結果的に出会ったと位置付けている。

日本で働き生活し続けることを選択する背景にある、日本の魅力について、協力者 A は次のように語った。

あんまり日常生活の中でそんなに考えたりしてないけど、親戚がやってくると、人の親切さ、でもあるし、まあアーキテクチャーとか、ごみがないという、落書きもあまりないし、というのはその、多分家族の、まあ意見だと思うけど、私自身だったら、あんまり、魅力としてはその、社会が、どう違うか分かんないけど、もう、もうちょっとあの、まあ冷静に、語り合えるかもしれない。ま、私があの一、日本でいて成長したことといえば、まああまり、あの一、怒って、なくなったということじゃないんだけど、怒り方、ま、自分が怒りを持って行動することが減った。日本、まあそういう、ルールに、に対して、そのルールを使えば、まあちゃんと、謝って、そっちの制度というか、私に、1つの助けだったかもしれない。ま、人と接すること、その前は、ま、コンピューターサイエンスのときは、まあ今の日本語だというと、オタクということがあって、あんまり、社会的人間じゃないだし、その一応、ま、社会的スキルももう習ったし、日本、その、挨拶のやり方とか、それも、よかったなと思うし。ま、単純なことだけど、もう、もっとあの、深いこともあるかもしれない。

町が全体的に落ち着いていて人が親切だというのが親戚の意見であることを紹介しながら、それ以外に、協力者 A にとっての魅力は、日本で生活する中で、以前のように怒りをもって行動することがなくなった、その背景に挨拶の仕方やコミュニケーションルールを使うことを習ったことがあるように感じると内省している。

#### 4.2.3 日本・日本語と関わって生きることに対する協力者 A の意識の変容に影響を与えた SD および SG

本節ではどのような経験が日本・日本語と関わって生きることに対する影響を与えているのかを考察するために、協力者 A の意識の変容に影響を与えたと思われる SD と SG を見ていく（表 3）。

まず SD は「リーマンショック」と「東日本大震災」である。「リーマンショック」は、大学卒業後、国の仕事を辞めて開始した日本の職場の仕事が自分の適性に合わないと考えて、適性に合った転職先が決まったときに起き、転職できなくなった。日本在留にはビザが必要なため、別の仕事を探さなくてはならなくなった原因となった。また、「東日本大震災」は、派遣の翻訳

者として民間企業に勤めていたときに起き、職場での翻訳の仕事が減り、契約打ち切りにつながった。どちらも、日本で働き生活するという強い希望の実現を阻害した要因である。

一方、SGは「言語教育観」、「家庭環境」、「アニメが若者にも愛好される」、「ネットフォーラム活動の活発化」、「日本語学習のネットフォーラムの存在」、「就職先にあった、離職せずに進学できる制度」、「交換留学制度」、「大学の日本語学習デザイン」、「交換留学先での出来事（翻訳アルバイト）」、「職場環境」、「日英翻訳は英語母語話者の報酬が高い」、「海外居住で契約更新不可」「米ドル安」「日本にいと心が穏やかになる」がある。

これらのSGは、本人の価値観に影響を与えるSG、人間関係に関わるSG、制度に関わるSG、日本で翻訳者として働くことのインセンティブに関わるSG、日本語学習を開始、または継続に関わるSG、日本社会に関わるSGの6つに分けられる。

まず、本人の価値観に影響を与えるSGには「言語教育観」がある。「勉強することによって、自分の視野や考え方が広がる」「社会では考えの異なる人と交流をするものだ」という「言語教育観」によって、ドイツ語学習や日本語学習の扉が開かれた。

また、人間関係に関わるSGには「家庭環境」「交換留学先での出来事（翻訳アルバイト）」「職場環境」がある。「家庭環境」では、姉の日本語学習経験は協力者Aの日本語学習の独学開始の助力なり、最終的に協力者Aが法律関係の翻訳を専門に選ぶ背景には、祖父やおじの仕事の影響で高校上級課程相当のときにリーガル・スタディを専門としたことがある。「交換留学先での出来事（翻訳の仕事を任される）」は、留学先の大学職員に無報酬だが、翻訳の仕事を任されたことが、翻訳に興味を持つことになり、将来の職業選択のきっかけとなった。「職場環境」は、現在の職場の同僚が翻訳者としての成長の助力となっている。このように協力者Aの家族や留学先の大学職員、就職後の同僚が、調査協力者の職業選択や継続の要因となっている。

そして制度に関わるSGには「就職先で離職せずに進学できる制度」「交換留学制度」がある。協力者Aは母国の機関に就職し、離職せずに進学できる制度を利用して大学に入学し日本語学習を本格的に開始したことが、現在の職業選択の要因の1つとなっている。また、大学時代の日本への留学経験は交換留学制度によるものであったが、このときの留学経験を日本に「いる」として自体に意味があり、日本語マスターの大きな一歩となったと位置付けている。

日本で翻訳者として働くことのインセンティブに関わるSGには「日英翻訳は英語母語話者の報酬が高い」、「海外居住で契約更新不可」、「米ドル安」がある。

そして、日本語学習を開始、または継続に関わるSGには「アニメが若者にも愛好される」、「ネットフォーラム活動の活発化」、「日本語学習のネットフォーラムの存在」、「大学の日本語学習デザイン」がある。協力者Aは独習で日本語学習を開始したが、この時期に日本や日本への関心を喚起し維持させたのがアニメ文化や、ネットフォーラムで、大学の日本語学習デザインは、日本留学を促したり、日本留学中は常用漢字をマスターする課題を出したりするなど日本語学習を集中的に学習し日本語力を伸長させる要因となった。

日本社会に関わるSGは「日本にいと心が穏やかになる」がある。協力者Aは、日本での生

活を続ける中で、国にいたときのように怒りをもって行動することが減ったと自己分析している。町に落書きなどが少なく、人が親切であるという点を、外国からの一時滞在者としての親戚のコメントを紹介しながら、自身は挨拶のしかたや誤り方などのコミュニケーションルールに則って行動することで対人関係が穏やかに進行することを覚えたとした。協力者 A が国では「社会的人間」ではなかったとふり返っていて、社会的スキルを日本で習ったと述べているので、「日本にいと心が穏やかになる」ことが本人の成長によるものか、日本社会の特徴なのかはさらに見ていく必要はあるが、本研究は SG と位置づけたい。

## 5. 考察

本稿は PAC 分析インタビューと TEM により調査協力者 1 名が EFP 「日本や日本語と関係を持ち続けて生きる」に至る径路を分析した。そして、日本・日本語と関わって生きることにに対する協力者 A の意識の変容に影響を与えた SD および SG をとらえた。

この中で、多く出てきたのは SG で、SG が複数のカテゴリーに分類された。協力者 A は JLPT の N1 合格のころまでは「ずっといっぱい日本語を勉強した」と述べ、日本語学習を集中して行っており、PAC 分析インタビューで、現在の人生は「日本語の勉強で得た人生」と評価している。この集中的な日本語学習を促したのが制度に関わる SG であった。

しかし、日本語学習自体は、PAC 分析インタビューで見られたように、現在は本人にとって意識されることのない「パッシブな力」として位置付けられるものになっている。日本語を本人にとって意識されることのない「パッシブな力」とし、EFP に至るまでの過程では、第 IV 期（日本・日本語と関わって生きようと思ったときから、翻訳者として自立するまで）の数年にわたる数々の転職経験の中で、弛まない努力と選択を行っている。これを支えていたのが、言語教育観などの SG、人間関係に関わる SG、そして日本社会に関わる SG である。

そして、リーガル・スタディや Computer Science を主に学んできた協力者 A が、日本社会や日本文化に関心を持ち、職業選択のきっかけや翻訳者としての成長の要因となっているのが人間に関わる SG があったと考えられる。特に、翻訳に関心をもつきっかけとなったのは、留学中の大学職員から翻訳の仕事を任されるという出来事であった。

## 6. まとめ

本稿では、調査協力者 1 名を対象に TEA を用いて分析し、協力者 A の EFP 「日本や日本語と関係を持ち続けて生きる」に至るまでの経験とその経験に影響を与えた社会的・心理的要因を詳細に記述した。この分析から見えるのは、日本・日本語と関係を持ち続けて生きる選択に、日本語学習が重要な意味を持ち、そこで日本語教育が果たす役割が大きいということとともに、母国や現地の友人とのつながりや、留学先の大学職員からの仕事の依頼など、調査協力者の人生の様々

な時点での出来事が、日本語学習の動機を高め、調査協力者が自身の将来を考えるきっかけになっていることである。

このような事実を踏まえ、日本語教育関係者がより広い視座から日本語教育・日本語学習をとらえ、日本語学習者の学習デザインを検討していくことが期待される。

## 注

本研究は科学研究費「移動して学ぶ」時代の日本語教育——留学体験の意味づけの変容（基盤（C）課題番号 16K02824）の研究活動の一部である。

## 参考文献

- 倉地暁美（2006）「カルチャー・ステレオタイプ」縫部義憲監修・倉地暁美編集『講座 日本語教育学 第5巻 多文化間の教育と近接領域』スリーエーネットワーク、66-81.
- 佐藤慎司・ドーア根理子編著（2008）『文化、ことば、教育—日本語/日本の教育の「標準化」を越えて』明石書店.
- 佐藤正則（2015）「なぜ私は学習者のライフストーリーを聴き続けるのか 日本語教師としての私の構えを記述することの意味」館岡洋子編『日本語教育のための質的研究入門 学習・教師・教室をいかに描くか』ココ出版.
- 坪根由香里・小澤伊久美・八田直美（2015）「中堅タイ人日本語教師の『いい日本語教師』に関するピループの変容とその要因」、タイ国日本語教育研究会第27回年次セミナー、於国際交流基金バンコク日本文化センター、2015年3月21日.
- 内藤哲雄（2002）『PAC分析実施法入門 [改訂版] 「個」を科学する新技法への招待』ナカニシヤ出版.
- 野呂加代子・山下仁（2001）『「正しさ」への問い』三元社
- 丸山千歌（2007）「日本語教材の文化トピックからの学習者の発想—学習者とのインタラクションの解明に向けたPAC分析の可能性—」『日本語教育のフロンティア』くろしお出版、161-184.
- 丸山千歌（2016）「学習者要因の分析①—PAC分析を活用した研究」徐敏民・近藤安月子編『日本学研究叢書 日語教学研究』外語教学与研究出版社、362-384.
- 丸山千歌・小澤伊久美（2011a）「日本語学習者が読解教材から連想するイメージ—PAC分析法を活用した留学前・中・後の縦断研究から—」2011年度異文化間教育学会第32回大会、於お茶の水女子大学、2011年6月11日（発表抄録集154-155）
- 丸山千歌・小澤伊久美（2011b）「ステレオタイプの読解教材に学習者の留学経験はいかに反応するか—日本語学習者に対するPAC分析法による縦断的研究からの示唆—」『日語学研究』、徐敏民編、華東師範大学出版会、203-213
- 丸山千歌・小澤伊久美（2011c）「留学経験から考える日本語教育の可能性—PAC分析を活用した縦断的研究から—」世界日本語教育大会、於天津外国語大学、2011年8月20日。（『異文化コミュニケーションのための日本語教育①』259-260）
- 三宅なほみ監訳、P. グリフィン他編（2014）『21世紀型スキル：学びと評価の新たなカタチ』北大路書房.

- 安田裕子・サトウタツヤ（2012）『TEM でわかる人生の径路——質的研究の新展開』誠信書房.  
安田裕子・サトウタツヤ（2017）『TEM でひろがる社会実装——ライフの充実を支援する』誠信書房.  
吉野耕作（1997）『文化ナショナリズムの社会学』名古屋大学出版会.